
花の高校生活

名倉透弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花の高校生活

【Nコード】

N7270C

【作者名】

名倉透弥

【あらすじ】

説明は嫌いな作者なので本編を見るまで内緒です。

一話

「オーバードライブとは何かを述べよ」

「はい。数千年前に起きた、ある兵器の暴走によって起きた大爆発の事。その後数百年に渡って起きた各地での抗争の総称でもある。語源はそのオーバードライブを引き起こした兵器の名前から来ている」

「正解だ。名倉は相変わらず優秀だな」

「俺なんて……」

「ああ……名倉の家は優秀だからな……」

「先生、オーバードライブって本当に起きた事なのでしょうか？」

「うむ、それは専門家の中でも大規模な虐殺を伏せる為だとか色々な説があるのだが……過去に行ってみないと判らないな」

「そうですね」

「オーバードライブに興味があるのか？ あれに関わってもロクな事が無いぞ。あれはただの殺戮兵器なのだからな」

「そうですね」

俺は会話をやめて席に座った。

オーバードライブ通称ODか……本当に半径1キロを吹き飛ばした兵器が存在するのだろうか……現代人には信じられた物じゃ無いな……

「ええ、次の問題は……ODが暴走した後、何百年続いた戦争を何と言うか。これは……佐藤、お前が答えろ」

「それは1000年戦争ですね。本当は千年もかかっていませんが、ほとんど千年に近かったので、その名前がついた」

「正解だ」

俺はオーバードライブについて知りたかった。もし、本当にオーバードライブがあるなら、それを弄ってみたかったのだ。

チャイムが鳴って俺は中庭に出てみる。

「はあ…… オーバードライブか…… 俺の目の前に現れないかなあ……」

「お兄ちゃん、こんな所にいたの？」

「ああ…… 夕紀か」

「何を考えてたの？ どうせまたオーバードライブの事でしょう？ あんな物存在しなかったんだってえゝ本当に存在したらまだ、クレーターがどこに残ってるはずでしょお？」

「あるかも知れないだろ。クレーターが」

「そんな半径一キロだよ？ 普通に地球衛星が見つけてるに決まってるでしょおゝそれなのにそんな事も言われないって事は……」

「やっぱり無いのかねえ……」

「いる訳無いでしょおゝ」

「お前だつて機械好きだろお？ いたら良いとか思わない？」

俺はベンチに座りながら空を眺めてみた。

「もつと他に良い趣味見つけなよおゝ」

「趣味ねえ…… たとえば？」

「その…… 高校生なんだからさ…… 好きな女の子とか……」

「好きな人…… ねえ」

「そ、好きな人とかいないの？」

「好きな人…… いるよ」

「告白とか…… したの？」

「告白ねえ…… 相手が俺の事を好きかどうか判らんのにしても傷つくだけだからなあ…… やってない」

「それって夕紀の友達だったりする？ 聞いてあげようか？」

「余計なお世話だつ」

俺は夕紀の額にデコピンをかました。夕紀が額を押さえてうずくまるのを見て俺は笑った。

「ははは…… 面白いな」

「うう…… せっかく親切に……」

「ただの好奇心だろうが……」

「バレたか」

「何年の付き合いやってると思ってるんだよ……もう10年はあるだろう？ それくらい判るっつーの」

「10年かぁ……」

「長いなあ……こんなけ長いと……やっぱ壊したく無いよなあ」

「壊す？ 何を壊すの？」

「お前には関係ねえよ」

「ああゝ隠し事お？」

「そ、隠し事だ」

「むうゝ」

「そうだ、俺の好きな人の事を聞いてくれるって言うてくれてありがとよ」

「どういたしまして。感謝してるならお礼として夕紀に教えてくれたって良いんじゃないかなあ？」

「お前だけには絶対に言わねえよ」

「ああゝ意地悪うゝ」

「悪いな。俺の問題だから俺が自分だけで解決したいんだ」

「ふうゝん。じゃあ夕紀の出る幕は無いね。でも……もし辛くなったら相談してね？ 一人じゃ解決しない事でもさ、人に相談すると解決できるって事もあるし……」

「了解」

「でも、お兄ちゃんくらいの人だったら誰に告白しても上手く行くと思うんだけどなあ……」

「じゃあさ……お前がもしされたらどうするよ？」

「何を？」

「俺に告白」

「冗談は受け付けないタイプだから」

「そっか……じゃあな」

俺がそう言うのと夕紀は『じゃあね、オーバードライブの事ばっかり考えてたらダメだよ』と言い残して去って行った。

「夕紀に相談したら解決力モ……か。そりゃあ夕紀に相談したら解決するだろうよ……」

「よっ！」

「だあっ！ お前は一体どこから現れるんだっ！？」

俺の一番の親友である中森真夜が俺の目の前に急に現れた。

「お前はいつも忍者みたいな登場しか出来ないのか？」

「はっはっは、こんな文明に侵された時代だからこそ昔の心と言う物は必要なだよ。忍者とか侍とかだなあ……」

「お前はどこぞやのエセ外国人か……」

「で、さっきの透弥の妹との会話だけど……お前の好きな人って誰なの？」

「夕紀にも言わなかったんだ……お前に言うはずが無いだろう？」

「お前の好きな人ってさあ……夕紀ちゃんだったりする？」

「なっ！ 何をバカな事を……俺が自分の妹を好きになったりするはずなんて……無いだろう」

「でもさあ、お前が夕紀ちゃんに隠し事をするなんて珍しいじゃん？ それってさあ……好きな人が夕紀ちゃんにバレたくないって事だよな？ 夕紀ちゃんに言ったら困る理由があるって訳だろ？」

「……お前は将来探偵にでもなりやがれ……」

「やっぱりなんだあ、俺が夕紀ちゃんに聞いてやろうか？」

「結構だ……アイツは好きって言うに決まっている……兄貴としてな」

「ほう……兄貴として好きなのは判っているのだが、男として好きなのか判らないから困っている？ お前らしくも無い……」

「何っ？」

「お前は本当に名倉透弥か……？ いや、今日のお前は偽者だな」

「何を言ってやがる……」

コイツは時々頭がおかしくなりやがる。今回もその類の物なのだろうか。

「これは余談だが……俺の知っている名倉透弥と言う男は……結果

などにこだわらずに、まずは自分の信念に基づいて行動する単純野郎だったはずだ……俺の目の前にいる男は結果にこだわっている男だな……」

「お前……励ましてくれてるのか？」

「さあな……俺はあくまで余談の話をしたただけだ……まあ親友としては『頑張れよ』と言うしかあるまいな」

「サンキュー……そうだな。何か俺らしくも無かったな……」

「やっと俺の知っている名倉透弥になって来たじゃ無いか……」

「ありがとよ」

「時間はどれくらい必要だ？ 指定された時間くらいなら教師をこまかす事も出来るが……」

「昼休み終了から一時間……いけるか？」

「俺を誰だと思っている？ 余裕だな」

「そうか……なら頼む」

「ふふふ……頑張れよ透弥……」

俺は真夜に言われた事を思い出した。そうだ、俺はいつも結果なんて関係無しに突っ走って来た。だが、今の俺は夕紀との関係の継続にこだわりすぎた……つたく俺らしくもねえ……

俺はダッシュで夕紀の元にまで向かって行った。

「夕紀」

「あ、お兄ちゃん。わざわざ夕紀に会いに来たのお？ ってそんな訳無いよねえ、何か用かなあ？」

「いや……少し夕紀と話がしたいなあ、と思つてさ」

「何の話……？ あ、さっきの相談かなあ？」

「良いから来てくれ」

「あ、そっか。ここじゃ話辛いよね？」

俺は夕紀の手を掴むと夕紀をひっぱって誰もいない、元々俺がいた中庭まで移動した。真夜が潜んでいる可能性はあるが、それを言い出したら真夜のいない可能性のある場所なんて地球上で存在しな

くなるのでカットさせてもらおう。

「俺の好きな人って誰か判る？」

「判る訳無いよぉ〜クイズは苦手だよぉ〜？ ヒントヒント」

「ヒント……か。俺と趣味が一緒……」

「お兄ちゃんの趣味い？ 機械弄りかなあ……」

そう言った瞬間に夕紀の顔が真っ赤になる。どうやら理解した様だ。

「判る？」

「え、えっと……だ、誰の事だかさっぱり……」

「この学校の一年生なんだ……」

夕紀の顔がどんどん真っ赤になっていく。そして俺はついに答えを言う事にした。

「つまり……お前だよ……」

一話（後書き）

取りあえず、第一話完成です。一気に最終話まで書いて投稿したので、これを皆様が見る頃にはすでに最終話が完成している訳でして、まあロボットが好きでオーバードライブと言う『大爆発』と言う意味の単語名をつけてロボットを命名したのですが、大した設定じゃ無く一回きりの捨て名前だったなあ〜と後悔しております。

この後悔を無駄にしない為に出来たのが機械さん。とっても可愛いのです。もう少ししたら出てくるのでお待ち下さい。

以上、この小説を見てくださった全ての読者様に名倉透弥より感謝の意をささげます。これからもよろしく願います。

二話

「つまり……お前だよ」

俺がそう言つたと夕紀は先程より顔を赤く染めた。

「え、えつと……本気？　なの？」

「冗談で言うか？　わざわざ呼び出して俺が冗談でお前に告白する
と思うか？」

「えと……な、何で夕紀なんかを好きになったのかな？」

「判んねえ……」

「へ？」

「判らないけど俺はお前が好きなんだ……いつからかは覚えてねえ
けど……いつからか俺はお前が好きになつちまった……これだけじ
や……ダメか？」

「強引すぎるよ……」

「悪い……」

「謝らないでよ……その、き……兄妹として……とかは無しだよ？
今更無しだよ？」

「当たり前だ……」

「ちゃんと云つて……夕紀が納得する様な言い方で……」

「ええっ！　そ、そんなの判らねえよ……」

「良いからっ」

強引なのはどっちだよ……と思いながら、俺は今言える範囲で考
えた。

「俺は……兄妹としてでなく……一人の女の子として夕紀が好きだ
……これは俺の本気の気持ちだ……説明とか苦手だから詳しい事は
却下。取り合えず、俺は夕紀に妹じゃ無くて、恋人になつて欲しい
んだ」

「……嬉しい」

夕紀がボソリと呟いた。

「え？」

「嬉しいよ……お兄ちゃんが夕紀の事を……」

「そ、そうか？」

「機械以外好きじゃ無いのかと思ってた……」

「あのなあ……」

「でも……まさかこんな日が来るなんて……」

「俺も嬉しいよ……ちゃんとと言える日が来るなんてさ……」

「でも、ちよつとだけ酷いかな……こうゆー事を言われる前はさあ

……ちゃんと心の準備って物が必要なんだよお？ それなのに……」

「ごめん、でも……一秒でも早く夕紀を俺の物にしたかったんだ……」

……

「夕紀は物扱いなの？」

「違う違う、俺だけの女の子って意味だ。物と言うよりは者だな……」

……

文章にしないと意味が伝わりにくい内容の会話である。言葉は文字にしてこそ意味を発する……昔の誰かが言ってたような……

「ゆう〜きっ」

「きゃっ！ 急に抱きつかないでよぉ〜」

俺は夕紀をギュツと抱きしめた。ギュツとギュツと抱き合えば〜

何だか夕紀にかなりの殺意のこもった視線を感じる……俺の気の所為なのか、あるいは一体誰なのだろうか……

俺は今、中庭にいる。中庭の周囲をグルリと見渡しても誰も見当たらない。やはり俺の見当違いなのだろうか……そうだったら嬉しい。

「ああ〜透弥先輩に抱きついちゃってえ〜」

「いやいや、あれは透弥の方から抱きついてるね」

「良いのっ!？」

「いやぁ……良いも何も透弥は俺の友達ってだけだから……俺、B

「しに興味ねえし……」

「でもっ！」

「でもじゃねえよ……透弥が夕紀ちゃんと付き合ってたって別に良いじゃん。俺が手ほどきした様な物だしさあ」

「真夜先輩はそれで良いんですかっ？」

「だ〜から〜別に俺BLじゃ無いから……」

「そうじゃ無くてえ〜っ！ お友達をあんまりっ子娘なんかに取り立て良いんですかっ！」

「鼎……少し落ち着け……別に透弥が誰と付き合いおうが関係無いだろう？ それとも鼎って透弥の事が好きなのか？」

「わ、私は真夜先輩が……」

「ありがとさん。なら黙って見とけや……良かったなあ透弥……」

「むう〜私は許せませんわ……」

「さつきから何を怒ってるんだよ……」

「私の大好きな透弥先輩を……」

「やっぱり透弥が好きなの？」

「好きにも色々種類があるんですっ！」

「ふう〜ん……」

「絶対に許さない……」

「邪魔だけはするんじゃ無いぞあ〜」

「いいえ、絶対にあの二人のカップルを継続させる訳には……」

「嫉妬してんの？」

「もち嫉妬ですっ！」

「あらら……一体俺と透弥のどっちが好きなのやら……」

「両方っ！」

「ま、まあ……そこそこにしとけや……ふう、屋上も寒いな……その双眼鏡片付けとけよあ〜」

「え、私がするのっ！？ 何でえ〜」

「俺は俺でする事があるの」

「私は嫌だっ！」

「判ったな鼎……」

「わ、判った……」

何故か判らないが鼎はいつも真夜に睨まれると逆らえない。別に怖いとかそう言う訳じゃないのに……何だかいう事を聞かないといけない様な気分になってしまっただった……

「もうっ！ 何で私がこんな雑用をつ……名倉夕紀……絶対に許さない」

つとまあこんな発言を俺も夕紀も気付くはずが無く、俺は適当にすこすハメになった。が、俺と夕紀の知らない所で（俺にいたっては、鼎という少女の存在すら知らない訳で）鼎による俺を取り返す計画が進められていた。

俺は真夜に一時間くらいの時間を頼むと言ったのに、話はすぐに終わって昼休みが終わる前に話が終わった。時間も余っているので俺は夕紀の教室で残りの時間を過ごす事にしたのだ。

「お兄ちゃん、今日ねお昼ごはん食べた？」

「あ、そう言えば食ってねえなあ……夕紀に告白する事ばっか考えて飯の事を考えて無かったよ」

「もう……食欲より夕紀の方が大事なお？」

「そりゃあ……まあ好きな人なんだからさ……当たり前だろう？」

「ちよつと嬉しい……かな？」

「ちよつとだけ？」

「あ、もつとつもつとだよっ！ これくらい。あ、もつとこれくらい……い」

夕紀が手を使ってジェスチャーをした。周りの人間の視線が凍りついているのが少し鈍感な俺でも理解できた。

「あ……あうあう……」

「大丈夫だから、泣くのは勘弁してくれよ」

俺が夕紀の頭を撫でてやると夕紀は泣く寸前で止まり、すっげえ可愛い笑顔を俺に見せてくれた。

その様子を面白く無い様な顔で眺めていたのは中森鼎であつた。

鼎は教室のドアを勢い良く開けると、こう言い放った。

「名倉夕紀っ！ ちょっと来てっ」

「あつ鼎ちゃあゝん。夕紀に何の用かなあ？」

「うう……眩しい。騙されちゃダメ……騙されちゃダメ……騙されちゃダメ……この女はこの笑顔で透弥先輩を騙したんだから……」

「何の用なのか言ってくれないと判らないよあゝ夕紀に何の御用なのお？」

「ちよつと話があるからついてきてっ！」

「え、夕紀にお話い？ 良いよお鼎ちゃんのお話って何かなあ？」

「大事な……大事なお話」

「良いよあゝ お兄ちゃん、待っててねえゝ」

いやあ……待っててねと言われてもだな、ここは俺のクラスじゃ無いわけなので、すぐく気まずい訳なのである。仕方無いので俺は夕紀の後をこっそりついて行く事にした。

「鼎ちゃん、お話って何かなあ？」

「単刀直入に言つと……透弥先輩と別れて」

「えっ！？」

俺は衝撃的な事を聞いた。俺が……夕紀と別れる……何故、何故俺がそんな事をしなければならなんだ……

二話（後書き）

このお話では超嫉妬娘の鼎ちゃんを登場させてみました。この子は本当は夕紀ちゃんラヴです。女の子なのに夕紀ちゃん大好きです。もつとコレをメインに書きたい感じもありますが基本的にメインは名倉透弥、名倉夕紀、機械さん（後に名前がつく）がメインなのでそれはまたの機会にでも書こうかなと。

さて、最後になりましたがこの小説を少しでも読んでいただいた読者の方々には深い感謝の意を送らせていただきます。また次回に後書きが皆様の目に触れる事を祈りながら次回作を投稿します。

三話

『透弥先輩と別れて』……そんな意味の判らない事を夕紀に言った鼎という女の子。俺は何でだよって突っ込みたい気持ちを抑えて隠れている事にした。

「はっきり言うわ。私は透弥先輩と付き合ってるアナタが嫌いなもの」
「ダメだよぉ皆仲良くしなきゃ楽しく無いよぉ？」 嫌いななんて言っても楽しく無いでしょぉ？」

夕紀は何て良い奴なのか……自分の事を嫌いと言った奴にまで情けをかけるなんて……

「アナタのそう言うぶりっ子的な所が大嫌いっ！」

「ぶりっ子って何かな？ あとでお兄ちゃんに聞いてみるね。少し頭悪くてごめんなさい……そだよ、話の内容が判らない子とか嫌になるのかもしれないよね……でも、話が上手くないだけで嫌いになったらダメだと思うんだ。だって話が下手とか上手とかで、その人の全てって判らないでしょ？」

「私は……」

「ね、鼎ちゃんに夕紀の事を好きになって……とは言わないけど他の人を同じ理由で嫌いになったらダメだと思うよ。ね？」

夕紀は鼎にキラキラした笑顔を見せた。

「やっぱり……やっぱりアナタは大っ嫌いっ！」

鼎が走り去って行ったのだが、一瞬鼎の顔が赤くなったのは気の所為だったのだろうか……俺もさっさと教室に戻らないとな……

「お兄ちゃん」

「よっ」

「あのねえ、鼎ちゃんって子が夕紀の事を嫌いなんだって……話が合わない子は嫌いって……」

いや、少し違う気がするが……あえて突っ込みはやめておこう。

その頃の屋上……

「私は夕紀ちゃんの事が……嫌い、好き、嫌い、好き、嫌い、好き……もおゝ好きなんかじゃ無いわっ！絶対に嫌いだもんっ」

「よゝゝ鼎、花占いなんてしちゃって……何を占ってるんだ？」

「べ、別に何も……」

「ついに鼎も同性愛に目覚めたか……ま、発展できて一番のお友達って所だろうな……」

「べ、別に私は……夕紀ちゃんの事なんて……」

「鼎ちゃん、大好きだよっ」

「な、何っ今のっ！」

「忍者たる者変声くらいは簡単だ。顔真っ赤だぞ？」

「もう……私は……夕紀ちゃんなんて……好き、なのかな」

「ははは、鼎は夕紀ちゃんが好きなのか？」

「私は……」

「透弥に相談してやるよ」

「ちょ、ちょっとっ！」

真夜は屋上を出て、俺に会いに来た。

「とおゝやつ！」

「な、何だよ気持ち悪いな」

「ちょっと話があるんだ」

「俺は今、夕紀と……」

「何だよゝ友達じゃあゝん」

「ウゼエ……」

「友達大事にしねえと……」

「恋人も大事にせにやイカンのよ」

「お兄ちゃん、夕紀は家に帰ったらいつでも会話出来るから……」

「仕方無い……下らん用事なら処刑だぞ？」

俺は真夜についていき、中庭まで移動した。ウチの学校はだいた

い中庭に誰もいないのだ。こんな静かな所に来る物好きもいないしな……

「で、何だ？」

「夕紀ちゃんの事が好きって人がいるんだ……」

「ふうん…… ってはあっ！？　だ、誰だっ」

「いやぁ…… それがよ…… この子なんだが……」

「えっと、確か…… 鼎ちゃんだっけ？」

「事情は判ったろ？　夕紀ちゃんを呼んで来て欲しいんだ」

「面倒……」

「人助けだと思って」

「仕方無いな…… 言っておくがな、お前の為にやるんじゃないからな？」

俺は夕紀を呼ぶ為に教室まで戻ってからまた、中庭に戻った。

「ちよっとお兄ちゃん…… こんな所で何をする気なお？」

「ほれ、連れて来たぞ……」

「か、鼎ちゃんっ！」

「こ、こんにちわ」

「夕紀に何か御用なの？」

「えっと…… 私、さつきは大嫌いとか言っちゃったけど…… その、

本当は…… アナタの事…… 大好きなのっ」

「あら、友達として…… じゃ無かったのね」

「真夜…… やりすぎじゃ無いのか？」

「鼎ちゃん…… 本気なの？　本当に夕紀の事が好き…… なの？」

「う、うん……」

「嬉しいよ…… 鼎ちゃんが夕紀の事を大好きって言うてくれたのは本当に嬉しいよ。でもね、夕紀には…… お兄ちゃんがいるから鼎ちゃんと付き合う事は出来ないよ…… だから友達としてなら…… ね？」

「アナタは優しすぎるよぉ……」

「アナタじゃ無くて、夕紀って呼んで良いよぉ～友達なんだからぁ」

「じゃ、じゃあ……夕紀ちゃんって呼んで良い？」

「もっちらんだよぉ」

「夕紀ちゃんっ！」

鼎ちゃんが夕紀に抱き付いた。何だか女の子同士って言うのも悪い物じゃ無いなと実感できた一瞬だった。

「もぉ～鼎ちゃんっしたら泣き虫さんだよぉ」

「私……私は……っ」

「泣いたらダメだよぉ」

「鼎……良かったな」

「ところで真夜……どうしてお前は鼎ちゃんの事を呼び捨てなんだ？ 俺は兄妹だから夕紀を呼び捨てだけど……」

「実はな……俺と鼎も兄妹だったのだ……これは鼎にも言っていない事実だ」

「えっ」

俺は一瞬意味が判らなかつた。真夜と鼎ちゃんが兄妹……？

「まあ……冗談だけだな……」

一話の最後に重大発言してこれかよっ！

「お前なあ……重大発言してそれかよ……」

「仕方ねえだろっ！ 作者の頭がバカなんだからよぉ」

「作者って誰だよっ！」

「知らねえの？ 俺達キャラを形成する人の事だぞ？」

「それ、もう滅茶苦茶発言だからっ！ 取り合えず、何で真夜は鼎ちゃんを呼び捨てにするんだ？」

「別に意味なんてねえんじゃねえの？ お前だって俺の事呼び捨てだろ？ 多分そんな感じだ……」

「ふむふむ……なるほどな……ってかさ、俺はもう戻って良いんだよな？ 夕紀はもう少し鼎ちゃんの側にいてやれよ」

「良いの？」

「友達は大事にしないとな……」

「じゃあ俺の側にいてくれよ透弥あゝ」

「黙れっ！ 殺すぞ」

俺は迫ってくる真夜の顔面を本気で殴った。少し鼻血を噴いていた気がしたのだが、まあ問題無いだろう。

「お兄ちゃん、放課後迎えに行くから教室で待っててね」

「ああ……」

俺はそのまま中庭を後にした。夕紀に友達が出来たか……嬉しい事だ。嬉しい事なのに、この胸の奥に刻まれる様な痛みは何なのだろうか……喜べ、喜べ俺……と自分に言い聞かす程に俺の胸はズキズキと痛む。

「それって……嫉妬じゃ無いの？」

「誰だっ！」

確かに今、誰かの声がした……バカな、俺が夕紀の友達に嫉妬……そんな事は無い……あつてほしくない……

俺は自分の教室に戻ってから深いため息をついた。俺は教科書を取り出してオーバードライブについて載っているページを何回も読んでみた。

いつもならこの時間が一番好きなのに今は考えがまとまらない。

「オーバードライブ……本当にあるのかなあ……」

「そんなの考えたって判らないよ……」

「誰だっ！」

今度は空耳では無く、実際に人が話しかけていたのだ。

「ご、ごめんなさい……」

「あ、いや……悪い。ちよつとイライラしてた……」

「そんなにオーバードライブが好きなの？ あんなに人を殺した兵器が……」

「別に昔の人間が何人死んだとか俺には関係無いよ……過去の過ちを覆す事なんて出来ないんだから……俺はね、機械が好きなんだ……そんな素晴らしい兵器がどうゆう原理で動いているのが気になる……」

そんな事を言っていると、教室に先生が入って来た。

「ええゝ授業を始める。まずは……ここの問い1の問題を名倉透弥、やってみなさい」

「はい。ええゝと」

俺は教科書をペラペラとめくりながら問い1のページを探していると、その教科書を何者かに奪われた。

「お兄ちゃんっ」

俺の教科書を持った夕紀が俺の隣に立っていた。

「お前……何やってんの？」

「そんなの関係無いよっ！　ちよつと来てっ！」

「いや、今は授業中だから……」

俺の意見なんて関係無しに夕紀は俺の腕をつかんで教室を飛び出した。

「じゅ、授業中だからあゝゝゝゝゝゝ！」

三話（後書き）

さてさて、今回は夕紀ちゃんと鼎ちゃんのラヴラヴを書いてみたいと言っていました、今回どうしても書きたくなったので急遽追加設定という事で書いてみました。本気で告白しちゃいましたね。

あと、夕紀ちゃんと鼎ちゃんのケンカ。会話がかみ合っていないのがまた夕紀ちゃんの天然っぷりを出していて可愛い感じだな〜と作者としてはウハハな訳です。

毎度好例ですが、この小説を見て下さった読者の皆様に感謝の意を送ると共に次回も皆様の目にこの本作が触れます様祈りながら次回作を投稿いたします。

四話

俺は意味も理解出来ずに夕紀に拉致された。授業中に一体何の用事があると言っただろうか……俺は機械学の勉強以外には興味が無いので、他の授業を受けるくらいなら夕紀と一緒にいた方が楽しいってのはあるが、後々の言い訳が非常に面倒なのである。

「おい夕紀……授業中に俺を連れ出したからにはそれなりの理由があつての事なんだろうな？」

「理由……？ そんなのお兄ちゃんと一緒にいたかつたじゃダメ？」

「ダメって事も無いが……そんな理由じゃ無いだろう？ お前は自分のワガママはダメだっていつも言ってるじゃ無いか」

「バレたか……あ、あのね……ちよつと相談があつて呼んだの……」

「授業が終わってからじゃダメなのか？」

「時間が無いの……これ、なんだけど……」

夕紀が俺に手渡したのは小さな機械だった。とつても小さくて冷たい機械だった。

「この子生きてるの……さっきまで動いて……意味は理解出来なかったけど言葉もしゃべってたの……夕紀じゃ助けてあげられないよ……この子……死んじゃうの？」

「……そうか、こんな小さな自律行動型があるならオーバードライブも自律行動型だった可能性もあるな……こいつを解析すればオーバードライブの謎にまた一歩進展が……夕紀、コイツは絶対に助けるっ！」

俺は夕紀をその場に放置して教室まで走り去って行った。

「あ、お兄ちゃん待ってよぉっ！ もう……夕紀と機械のどっちが大切なのか判らなよぉ……でも、そんなお兄ちゃんを好きになっちゃったんだから仕方無いよねえっそうだっ！ 機械以上に夕紀の事を好きになっちゃう様にしてやれば良いんだっ！」

俺はその頃、誰もいない技術室で夕紀に渡された機械の解析及び

修繕に取り掛かっていた。

「くそっ！　こんな教室程度の工具じゃ直せねえよ……家に帰る時間もねえし……どうしろってんだっ」

その時、技術室の扉が勢い良く開いたが、俺は機械に夢中だったので、特に気付かなかった。

「やっぱり夢中になってる間は誰にも気付かないんだ……」

夕紀は透弥の部屋に行つて取つて来た工具を机の上にそつと置いた。

「頑張つてね、大好きなお兄ちゃん……」

俺は技術室の工具だけで悪戦苦闘していた。あまり技術専門の学校では無いので技術室と言う物があつても基本的な工具しか揃つておらず、専門的な工具は全く存在しなかったのだ。

「こんな物で直せるかよ……」

俺はふと、机の上にある工具を見つけた。工具箱と何やら便箋が添えられていた。

「これは……俺の工具箱？　それに便箋……」

内容は、『夕紀が勝手に頼んだ仕事なのに頑張ってくれてありがとう。頑張つてね。夕紀の大好きなお兄ちゃんへ』だった。

「夕紀……」

俺は使い慣れた自分の工具で夕紀に渡された機械を修復していた。

そして時間は放課後……授業は良いのかと自問自答しながら、結論は、『夕紀の為だ、仕方無い』に辿り着いた。

「ふぁゝ終わつたぁゝもう五時かぁ……俺も帰つて夕紀にコイツを渡すかな」

俺が立ち上がって帰る準備をしていると、夕紀が椅子に座りながらぐっすりと眠っていた。

「コイツ……いつからいたんだ……」

「@:~::~@:~::~@:~::~@:~::~@:~::~¥~::~」

意味の判らない機械語を話し出した。

「ああ……パッチを当てないとな……」

詳しい事は省くが、何とかパッチを当てる事によって、機械にも日本語が話せる様になった。

「寝てるー寝てるー」

「見たら判るよ……静かにしてやってくれ」

「黙る？」

「そ、黙るか静かに会話……お前、俺の言う事聞いてくれるのか？」
俺の言う事を聞いてくれる様だ。何とも嬉しい事では無いか……

「お前、俺、修復した……スゴイ奴、恩人、恩人」

「そっか、恩人か……お前じゃ無くて、透弥って呼んでくれるか？」

「透弥……判った」

「あと、あそこで寝てるのは俺の妹だ。壊れたお前を拾った奴だ。
アイツも恩人だぞ？」

「判った」

さて、面白い奴がペットになったな……しかし、いくら小さいとはいえども機械なら多少の重さはあるはずなのだが……コイツからは重さなんて感じられない。だいたい野球ボールくらいの重さだろうか。

「さて、夕紀を連れて帰るか……お前は俺のバッグにでも入ってな」

「俺、透弥って呼ぶのに、透弥は俺の事をお前か？」

「そうだなあ……さすがにお前つてのはマズイか……よし、明日、お前の名前を考えてやるよ……」

偶然にも明日は夕紀の誕生日だ。修復したコイツを渡したら喜んでくれるだろうなあ……

俺は夕紀を背中にかついでから技術室を出て家に向かった。

そして家について……

「ふう……お前は軽いのに夕紀は昔より少し重くなったな……」

「成長してるって事だ……機械は成長しない。機械はずっと同じ形だ……成長はパーツを変えられた時だけ……」

「そっか……お前機械のクセに結構ややこしい事を考えるんだなあ？ たまには『人間とは違うから難しい事判りませえ〜ん』って開き直ってみるのもアリなんじゃ無いのか？」

「参考にしておく……」

「明日は夕紀の喜ぶ顔が目につかぶ……」

そして、俺はその日は早く寝る事にした。

そして翌日……夕紀の誕生日日本番。

「夕紀、朝だぞ〜起きろお」

「あ、お兄ちゃん……今日はお兄ちゃんの方が早く起きるなんて……何か良い事でもあったのお？」

「まあな……朝飯も少しマズイかも知れないが俺が作ったんだぞ〜」
「え、ホント!？」

俺は夕紀を連れて朝食を取る事にした。夕紀が俺の作った飯を口に運ぶ。

「ど、どうだ？」

夕紀の顔が一瞬だけ鬼の様な形相になってから、いつもの可愛いキラキラの笑顔を俺に見せてくれた。

「さ、最初は誰だって……こんな物だよね？ 今度料理を教えてあげるから……ね？」

遠まわしに不味かったって事か。そんな遠慮は余計に傷つけるだけだぞ……

「ああ夕紀、俺はちょっと用事あるから一緒に帰るのは無理っぱいわ……今日は久しぶりにチャリで行くし」

「そっか……うん、じゃあ今日は鼎ちゃんと一緒に帰るね。あ、行くくらい一緒にいけるよね？」

「お前自転車の二ケツOKだったっけ？ スカート見えるとか言ってたけど」

「お、お兄ちゃんと一緒なら大丈夫だよぉ」

「そっか、じゃあ早く着替えて来いよ。待っててやるからさ」

「了解っ！」

俺は一度自分の部屋に戻ってから機械に話しかけた。

「俺は今から学校に行くからおとなしくしてくれよ」

「了解、この機械達と遊んで良いか？ 自律ユニットは無い様だが……一様同胞だからな……」

「ん……まあ良いだろう。壊れたら直したら良いんだしな」

「透弥も他の人間と一緒にか……壊れたら直せば良いじゃんって感じなのか」

「違うつ！俺は自分の所為で傷ついた機械を直してやるのは当たり前と思っっている。その機械の寿命が来るまで俺は直し続ける……人間が風邪ひいたら治療するのと同じだ」

「意味は良く判らんが……透弥が機械を愛しているのは伝わった……」

「そっか、なら良かった」

「やっぱり俺も連れて行け……」

「学校にか？」

「うむ、人間の学び舎と言う物を見てみたいのだ」

「じゃあねえな……」

俺は機械をかばんに詰めて自分の部屋を出て、一階に降りた。

「遅ぉい。何やってたのお？」

「悪いな」

俺は笑顔でごまかして家を出た。

「しっかり捕まってるよ？ じゃないと落ちるからな」

「う、うん……」

俺は夕紀が怖がらない様にゆっくりめに自転車をこいだ。夕紀は最初は俺にギューっとしがみついていたが、だんだん慣れたのか俺と会話出来るくらいにはなっていた。

「はい、学校到着〜！」

「送ってくれてありがとう。あ、夕紀ちょっと用事があるから先に行くね」

「おう、俺はだいたい中庭か教室にいてるわ」

「今更言わなくても判ってるよお〜」

「じゃあな……」

俺は中庭に向かって歩いて行つた。ここが一番落ち着く……知り合いしか入って来ない聖域みたいなモンだ。

「ほら、出て来いよ」

俺はカバンに詰めた機械を外に出した。

「全く……機械苛めだ……あんな狭い所に俺を詰め込むとは……」

「ははは、悪いな……他に入れる所が無くてよ」

「なら昨日みたいに肩に乗せてくれればよかるう？ 昨日の透弥の

肩は乗り心地が悪くは無かったぞ」

「夕紀にバレたら意味ねえんだよ……」

「ふむ……なら透弥の後ろにいるのは透弥の妹では無いか？ 確

か夕紀とは透弥の妹だったな……」

「お兄ちゃん、夕紀に隠し事お？」

「な、何でもねえよっ！」

「ふぎゅっ」

俺は機械をカバンに詰め込んだ。変な奇声が聞こえたが気にしてはいけないのだ。

「今、何か変な音しなかった？」

「そ、空耳だろ？」

「何でそんなに焦ってるの？ あと、そのカバンのふくらみは何かな？ 学校に不要物って関心しないなあ〜風紀委員として没収しちゃうよお〜？」

「お前風紀委員なの？ 違うだろ？」

「何でも良いからおにいちちゃんは夕紀に隠し事なんてダメえっ！」

俺は夕紀にカバンを奪われて、中身を見られてしまった。

四話（後書き）

最近思う事が一つ。プロの小説家さんとかは後書きに日常とかをつづったりもしています。

ですので私こと名倉透弥も日常を語ろうかと思っています。最近ラテールと言うゲームにはまっており、スゴク楽しいのです。名倉夕紀と言う名前でプレイしているのですが、このキャラもすごく可愛くて……

っと、話が脱線したのでここで終わ리と言つ事にいたします。

この小説を読んでいただいた全ての読者様に感謝感謝w

第五話

「なあゝんだ……昨日の機械じゃん……何でそんなに焦ってたのかなあ？」

「だから何でも無いって言っただろおゝ夕紀が急に來たから恥ずかしくて焦ってたんだよ……」

これも本当の事である。急に夕紀に話かけられるとドキツとする。
「なあゝんだ……あ、夕紀は鼎ちゃんに呼ばれてたんだっ！ 行ってくるねえ」

夕紀は高速で走り去って行った。俺は一度ため息をつく。

「ナイス機械……」

「ふふふ、俺も機械とは言え、多少の人間の心を理解するくらいには優秀なのだよ。話によると今日は透弥の妹の誕生日らしいな。隠してるとすると……俺をあの女にプレゼントと言った所か？」

「機械のクセに何でそんなに詳しいんだ……」

「まあ良い……しかし、俺をプレゼントしたらお前の妹は悲しむぞ

……」

「どういう意味だ？」

「解体は勘弁だから正直に言わしてもらおう。透弥も判ってるはずだ……あの女はお前に祝って欲しいのだろう？ ならば妹を喜ばせるだけのプレゼントなど意味が無いのだ。透弥は誕生日を口実にある女を喜ばせてやろうとしているのでは無いか？」

「……」

「……お前がすべき事は妹を愛する事……これを忘れるなよ？」

「判ってるよ……」

「それが俺をプレゼントする……になるのか？」

「それは……」

「熱くなるな。お前、最近は妹と付き合うつて事に意識しすぎて無いか？」

「別にそんな事は……」

「俺から言わせりゃ……」

俺は機械のバッテリーと予備電源を抜き取った。

「夕紀と付き合う事になってから俺が変わった……か。確かに夕紀に嫌われない様に意識しすぎてたかも……」

「お兄ちゃんあゝん」

「夕紀……」

何と都合の悪い時に夕紀に会うのだろうか……しかも、さっきどこかへ行ったばかりなのに……

「お兄ちゃん？ 暗いよお？」

「俺に見せないでくれ……」

「え？」

「今の俺にそんなキラキラした笑顔を見せるなっ！」

「お……兄ちゃん？」

「ごめん……」

俺はそう言うとその場を走り去った。最低だ……俺は何て最低な男なんだろうか……機械なんか俺の心を読まれて……それでイライラして夕紀を傷つけて……そのまま放置して……

俺は……最低だ……

「お兄ちゃんに……嫌われた……夕紀が何をしたんだろう？」

一方、その頃の透弥……

「なあ機械よお……俺はどうしたら良いんだ」

「勝手に電源抜いてそりゃあねえだろう？ 今、ちょっと修復パッチ当ててるから待っててくれよ」

「はあ……夕紀を傷つけて……最低だな」

「俺の記憶パッチが先程のやりとりを教えてくれたが……透弥……最低だな」

「そうだな……」

「おいおい、何だとっ！　とか言い返してくれねえと話がつながら
んだろう？」

「いや……俺は最低だ。お前に言われた事も事実なのに……それに
イライラして夕紀を傷つけるなんて……」

「透弥……それ程アイツが好きなのか？」

「ああ……夕紀がいなけりや俺の一日は始まらない……家で起きた
時にあのキラキラとした笑顔を見て俺の一日は始まるんだ……夕紀
には感謝しても足りないくらいのをしてもらったのに俺は……」

「ちよつと待つてな……今、助けてもらった恩を返すぜ……」

「お、おい……どこに行くんだよ。つたく、お前くらい側にいて
くれても良いだろうがよ……」

俺は寝転がって空を見上げた。

「今日も青いなあ……」

持つて来た本を開いて読んでみた。

その頃の機械は……一年生の教室にいた。

「おう、お前だお前っ！　えっと、名前はなんだっけ？　ああ忘れ
た、透弥の妹だな？　ちよつとついてきやがれ」

「あ、お兄ちゃんの機械さん……」

夕紀は何も疑う事無く機械についていった。

「何の用ですか。」

「いやね、さつき透弥が屋上にいたんでね……」

「良いんです……きつとお兄ちゃんは夕紀の事が嫌いになっちゃっ
たんですよ……夕紀がお兄ちゃんに頼りっぱなしだったから疲れち
やったんだ……今まで友達がいなかった夕紀を守ってくれてたから
……依存しすぎちゃったのかも……」

「はあ……判りにくい兄妹だね……透弥はアンタがいなけりや一
日が始まらないって言うてるのに……」

もっ、このお話は機械さんもメインキャラになってますね。それ
なのに名前が無い機械さん。頑張ってください。

「お兄ちゃんが……そんな事を？」

「俺は機械だからウソは付かない。人間に入力されたデータをウソで返したりはしないいゝ」

「お兄ちゃんが……」

夕紀はダッシュで走って行った。

「さて、機械の俺はどこにいればあゝ」

機械さんは自分の居場所を求めて校内の旅に出た。

「お兄ちゃんっ！」

「夕紀……どうしてここに……」

俺はびっくりして持っていた本を投げ捨てて夕紀の方を向いた。

「理由が聞きたいから……こんな納得のいかない事で避けられるのって……納得出来ないから」

「理由も何も……俺はお前にふさわしく無いんだ……」

「ふさわしく無いって何？ そんな資格とかつている物なの？」

「俺の気持ち何だよ……」

「そっか……夕紀の事が……嫌いになっちゃったんだ……」

「違うっ！俺はお前が好きだ……でも、今の俺はお前に……」

「何なのそれ……意味判んないっ！」

「夕紀……悪いが今の俺はお前に会える様な奴じゃねえんだ……」

「夕紀がこんなにお願いしてるんだよ？」

「夕紀……俺は……」

「ねえ……お願いだから元のお兄ちゃんに戻ってよ……夕紀がこんなにお願いしてるのに……それでも嫌なの？」

俺が屋上から校舎に入ろうとすると、俺は前に進めなくなった。夕紀が後ろから抱き付いてきたのだ。

「夕紀、離してくれ……」

「ヤダ……夕紀にはお兄ちゃんが必要なんだよ……」

「俺はお前にどうやって接してやれば良いのか判らないっ！」

「訳わかんないっ！ そんなに自分が大事なのっ！？」

「お前は自分が大事じゃないのか……？」

「お兄ちゃん変わったよ……夕紀は好きな人の為なら自分を捨てたって構わないよ……それなのに……何でこうなっちゃうのかなあ……こんなのなら付き合わなかった方が良かったのかな……お兄ちゃんの心が判んないよ……こんなんじゃないお兄ちゃんの事……嫌いになっちゃうよ……」

「結構だよ……俺は正直お前とどう接すれば良いのか判らない……ずっと考えてるだけなんだ。こんな考えるばかりなんて……俺には苦痛なんだよっ！」

しまった……と思った時にはもう遅かった。夕紀の顔からは涙が流れ出していた。

「苦痛……夕紀と一緒にいるのが苦痛なの……？」

「いや、それは……」

「それだけは言われなと思ってた……頑張らなくて良いって言うから言われなと思ってた……それなのにお兄ちゃんは夕紀といることが実は苦痛だったんだね？」

「俺は……」

「最低……好きでも無い人と付き合うなんて……夕紀の目の前から消えて……」

「夕紀……？」

「早くっ！ さっさと消えてよっ！」

夕紀にこんな事を言われるとは全く思っていなかった。まあこんな事を言われてしまうのも仕方の無い事である。俺は夕紀を傷つけた。俺の所為で夕紀がこんな事を言っているのだ。

俺は夕紀を払いのけて屋上から走り去って行った。

雨が降った気がした……

俺の心の中で……

その雨はいつしか雷雨に変わり

俺の心を打ち砕く

気付けなかった愛情に

ただただ後悔するだけの

俺は何て醜くて

何てちっぽけな存在か……

第五話（後書き）

ああ、透弥くんがとうとう夕紀ちゃんに振られちゃいました。

今回はカップルにだって痴話喧嘩くらいあるだろうと思った作者の唐突な思いつきで急遽本編のエンド展開を改造してまでも作り出されたお話です。

自作もまた皆様の目に触れる事を祈りつつ、感謝の意を述べさせていただきます。

第六話

外は本当に雨が降り始めていた。まるで俺の心を写しているかの様に……時刻は朝の10時くらい。それなのに外は夕方の様に薄暗くなっていた。

俺の心も外も晴れる事は無く時間は流れて行く。

昼食時になつても俺のノドを飯が通る事は無く、ただ適当に時間を過ごし、放課後になった。

「あ、本を屋上に捨てたままだ……でも雨で……ええい、放置つてのも可哀想だよな」

俺が屋上に行つて最初に目についたのは本では無く、雨に打たれてボトボトになつていた夕紀の姿だった。

「夕紀っ!？」

「えへへ、来るの遅いよお……この本……大切にしてたよね？ 雨に濡れたらダメだから……濡れない様に服の中に入れてたんだよ……」

「バカ……校舎に入ったら良いじゃないか……」

「ダメだよ……お兄ちゃん夕紀の事が嫌いでしょ？ 夕紀の事が大嫌いなお兄ちゃんがいる校舎なんて……怖くて入れないよ……」

「バカ野郎……」

「野郎じゃなくて女の子だよ……でも、最後にお兄ちゃんの大切な物を守つてあげられて……満足かなあ？」

「最後つて……何言つてんだよ……早く校舎に入れよ……」

俺は夕紀を引っ張つて校舎に入れようとしたが、夕紀に手を払われた。

「ヤメてっ！ 優しくしないでよ……もう、良いの……お兄ちゃんにお情けなんかで優しくされちゃったら……夕紀はますますお兄ちゃんの事を好きになっちゃうから……叶わない恋なんて……つらいだけ……」

「冗談言っでないで早く校舎に入れって……その熱だと死んじまうぞっ！」

「死んだって良いよ……」

「何……言っでやがる」

「夕紀はもう、死んだって良いの……」

「冗談言っなよ……死んでも良いなんて言っのはやめろ」

「どうして？ お兄ちゃんにそんな事を言っ資格があるのかなあ？」

夕紀は今まで精一杯生きて来た……辛い事も悲しい事も苦しい事も……お兄ちゃんに会えると信じたら全部吹っ飛んでた……それがいつからか恋に変わって……お兄ちゃんだけが夕紀の生きる理由になっでいたのに……その生きる希望を奪ったのはお兄ちゃん本人でしょ？ そのお兄ちゃんが夕紀に生きろっで言えるの？」

「俺は……お前の事を嫌いになんて……」

「ウソ……優しい言葉なんてかけないで……この偽善者……」

「ああ……別に偽善で結構だ……俺は今、顔を真っ赤にして明らかに熱が出てそうなお前を助けてやりたいんだよ。偽善とか、情けとかどうだっで良いんだ」

「夕紀が望んでるのは偽善でも情けでも無い……現実なの。リアルを望んでいるの……現実にお兄ちゃんに愛されたい……好きでいて欲しい……そう思っでいたのにっ！」

「夕紀……」

「ほら、この本を持っで帰っでよ……帰っでばっ！ 夕紀はもう死にたいんだからっ！ もうこんな残酷な現実大嫌いつ！」

「嫌だ……」

「え？」

「お前が雨に打たれ続けるなら俺もお前と一緒に雨に打たれ続ける……お前が死ぬっで言っんなら……俺も一緒に連れていけよっ！」

「何……言っでるの？ そっか、また冗談でしょ？ お兄ちゃんがそんな強い精神な訳無いもんね？」

「証拠をお前に見せてやる……」

俺は工具を取り出して屋上のドアを溶接した。

「これで、ここから出る事は出来ないな……さて、一緒に死ぬか？
ほら、どうやって死ぬ？ このまま雨に打たれて熱で死ぬか？
飛び降りるって言う手もありだよな？」

「何やってんの？ バカじゃないのっ！？ 本当に死んじゃうよ？」

「死にたいんだろ？ 天国に行ったら今度は二人仲良く暮らそうや
……こんな現実にしちゃってごめん……全部俺の所為だな」

「お兄ちゃんっ！ 頭おかしくなったの？ 本当に死ぬんだよ、判
つてるの？」

「判つてるさ……お前が死ぬって言うなら俺もついていく……こん
な事くらいでしかお前への愛情を示す方法が考え付かなかったんだ
よ……バカな兄ちゃんて悪かったな……」

「本当は死にたく無いよ……お兄ちゃんが夕紀の事を好きなら死に
たくなかないよお……」

「もう遅いな……」

「誰かドアを開けてよっ！ 死にたく無いよ、夕紀の大好きなお兄
ちゃんと一緒に生きたいよおっ！ 雨、やんでよおっ！」

夕紀は泣いているのか、ただ雨で顔が濡れているだけなのか……
「お兄ちゃん、何とかしてよっ！」

「いや……俺も夕紀と一緒に死ぬ気だったから何も溶接を切り裂く
機械は用意してないんだよな……ごめん、まあ天国で二人仲良く暮
らそうや……」

「嫌だっ！ 死にたくないよおー！ 誰かあっ！」

「もう無駄だつて……」

最初の方はずっとドアを叩き続けた夕紀だったが、次第にドアを
叩くのをやめた。

「もう良い……疲れた……」

「そうか……死ぬ覚悟できた？」

「うん……そうだ、最後まで抱きついてても良い……よね？」

「そうだな……」

夕紀の顔が赤くなった。恥ずかしくて赤いのか、雨で寒くて赤くなっているのかは俺には判らなかった。

第六話（後書き）

さて、とうとう作者の頭がバグり始めた頃です。恋愛小説で死ぬとかそんな展開にして良いのかなと……

まあ、そう言う展開もアリじゃ無いかと言う事でこんなお話になりました。

作者としては、透弥くんの『お前が死ぬって言うんなら……俺も一緒に連れて行けよ』と言うセリフに惚れそうになってしまいましたね。普段は普通なのに言う時は決めちゃうんですねえ

この作品は実は私の第一作目なのです。

では、次回も皆様の目に作品が触れます事を祈りつつ、見ていただいた読者の方に感謝の意を述べつつ次回作に取り組みたいと思います。

第七話

俺はどうしようか真剣に悩んでいた。このままだったら本気で死んでしまう事になる。俺は突発的にドアを溶接したので、溶接した物を切る工具は持っていないのだ。

「お兄ちゃん……暖かいよ」

「そっか……最後まで……一緒にいてやるからな」

「ちよつと疲れたよ……お兄ちゃんの胸を枕代わりに……寝ても良い？」

「寝たら死ぬぞ？」

「別に良いよ……死んだらお兄ちゃんもついてきてくれるよね？」
夕紀は寝たというより気絶に等しかった。

「ちっ……俺もそろそろ覚悟するかな……夕紀、お前一人を逝かせたりしないからな……」

それから数分経っただろう。夕紀が寝てから時間が経っている。
「そろそろマズいか……」

俺は工具を手にとって、あと数分で覚悟を決める所だった。思っていたらどこからか声が聞こえた。

「恩人は死なせねえっ！」

その瞬間、ドアが爆発した。

「透弥っ！ 生きてるかっ？」

「機械……遅いんだよ……今から夕紀を病院に連れて行くから駐輪場に行つて俺のチャリを手配しとけ」

「了解」

俺は近くにあった傘をパクってから駐輪場に向かった。

「透弥、チャリは出しておいたぞ」

「OK、お前は俺の肩にしがみついてろよっ！」

俺はチャリを飛ばして病院に向かった。ラッキーにも病院はまだ

開いていた。

夕紀は体温が34度くらいまで下がり意識が無いとの事で早速治療されたが、俺は夕紀に専念してもらいたいで治療を断り、ストープの前に座らせてもらった。

他の老人達がコーヒーをくれた人には人の優しさを感じた。

夕紀がベッドに乗せられて入院室に移動する様だ。俺は同伴の許可を取ってから病室に向かった。

「夕紀……起きてくれよ……」

「透弥、あまり悲しみ過ぎるのも良く無いぞ？　この女が目覚めるか目覚めないかは時間次第なんだ……」

「テメエ……良くもそんな冷静にいられるよなあ……所詮テメエには関係の無い奴かも知れねえけどよ……」

「拾ってもらった命の恩人だ……でも、ここで冷静じゃ無かったら何か変わるのか？　頭冷やせ透弥……」

何だか機械に説教されるって……

「悪かった……お前の言う通りだ……夕紀、早く起きてくれよ」

俺は夕紀の手を握ってやった。

「透弥、何か俺に出来る事はあるか？」

「そつだな……俺の家から傘を持って来てくれるか？」

「錆びるから無理だな……」

「じゃあ何もねえや……」

「すまん……」

「謝ってんじゃねえよ……」

俺は夕紀の手を握りながらずっと夕紀が起きるのを待った。

「透弥、お前も病人なんだから少し寝たらどうだ？　監視なら俺がしておこう」

「機械……お前って機械のクセに気が利くよな……」

「うむ、お前達には早く元気になって俺に名前を付けてもらいたい」

「悪いな……名前は少し先になる。俺も少し寝るか……」

俺は椅子に座って夕紀の手を握ったまま、壁にもたれて寝る事にした。

そして翌日……

俺より先に目覚めたのは、やはり夕紀だった。

「確か昨日は……生きてる……それに、ずっと手を繋いでくれたんだ……」

「お、目が覚めたみてえだな。透弥もずっと心配してたぜ？」

「へえ」

「透弥のヤツ……何か喜ばす為に俺をアンタに見せてやるとか言つて……そんなんで喜ぶのか？つて聞いたら俺は最低だとか何とか……」

「ふうん……じゃあ機械さんの所為でお兄ちゃんはある風になつて事なんだよねえ？」

「げっ！」

「機械さん機械さん、解体されなくなったらお兄ちゃんをベッドに運んで」

「けっ、そんな娘ツ子に解体されつかよっ！　まずそんな細い腕で工具を扱えんのかあ？」

機械は完全に夕紀をナメていた。夕紀は透弥の工具を手の上で回してから構えた。

「何か言つた？」

「ごめんなさい……すぐに運びやす」

機械は力持ちなのか、透弥を一瞬で夕紀のベッドの上に運んだ。「何をする気で？」

「お兄ちゃんも病人なんだから、ちゃあんとベッドで休まなきゃ……この病院はベッドも空いてないのかなあ？」

「透弥はアンタの世話をする為に治療さえも受けてねえんだが……ま、これは言わなくて良いか……」

「そ、そんなのダメっ！　ちゃんと体温測らなきゃっ！」

「き、聞こえてたか……透弥の意思なんだから別に良いんじゃないかねのか？」

「お兄ちゃん私の為なら頑張りすぎる所があるから夕紀が管理しなきゃダメなのっ！ 全く、夕紀の為に一緒に死ぬとか言い出すし……」

「それだけ愛されてるって事だな……」

「夕紀が……愛されてる？」

「そりゃそうだ。普通は死ぬって言った奴に『じゃあ俺も一緒に死ぬ』なんて事を言ってくれる奴なんざいねえよ。しかも雨に打たれてお前さんを病院に運ぶだなんてよお……」

「そっか……嬉しいなあ」

「あ……びぎゃ、びびぎゃ……」

「ど、どうしたの？」

「そろそろ俺の寿命……ギヤギヤギヤ。」

「寿命っ！？ すぐに直さなきゃっ！ で、でも夕紀には判らないよお……」

夕紀が悩んでいる内に機械は火花を上げてショートしていた。

「ギヤギヤギヤ……」

「名前もつけてあげられなかったね……そうだ、機械さんの名前は夕弥にする」

「俺の名前……夕弥？ うむ、良い名だ忘れん……ピピピ……ギヤギヤ」

「さよなら……」

夕紀がそう言つと、そのまま夕弥はしゃべらなくなり、ぴくりとも動かなくなった。

「表情の無い機械さんだったけど……今は笑顔に見えるな……気の所為だよな」

「ふあ……おはよう夕紀……って、泣いてるのか？」

「機械さんが止まっちゃったの……」

「ちよっと貸してみ……ああ、コイツはダメだな。機械がこげちま

つてる……コイツの寿命って訳だな……」

「可哀想……」

「名前をつけてやりたかったな……」

「この子の名前は夕弥って言うんだよ。お兄ちゃんと夕紀の子供だから夕弥って言うの」

「俺と夕紀の……か。確かにそんな感じだったなあ……悲しいのは判るが……あまり一人で背負い込むなよ。コイツが止まったのはお前の責任じゃ無いんだからさ」

「判ってても……割り切れないよ」

「悲しいときは誰かに甘えてみるのも一つの手だと思う……」

「甘えるのはダメだよ……」

「お前はいつだってそう一人で背負い込むな……たまには誰かの手を借りたって良いじゃないか……」

「夕紀は……」

「俺は少なくともお前に頼りにされたいと思うな……」

「良いの？」

「良さ……甘えたい時は甘えたら良いし、泣きたい時は泣けば良い……」

「泣き顔って見られるのヤダな……」

「顔……隠しておいてやるからさ……」

「うっ……ふっひっく……うわあああん」

夕紀は俺に抱き付いて思いっきり泣いた。俺は産まれて初めて夕紀の泣き顔を見た気がした。ずっと一緒にいた。十数年も一緒にいたのに初めて夕紀が泣いた。何だか不思議な感覚であった。

第八話

「もう良いのか？」

「うん、充分泣いた……えへへ、夕紀の記憶の中で泣いたのって始めてだよ」

「そうか？ あの屋上の時に『誰か開けてよ。死にたくない』って叫んでた時は泣いて無いのかあ？」

「あれは泣いてないよ」夕紀はお兄ちゃんの前じゃ絶対に泣かないって決めてたもんっ！ その決め事もお兄ちゃんの所為で無くなっただけ……」

「そんなに強がる事無いって……今も夕弥が止まって悲しんでるお前の泣き顔を隠すくらいしか出来なかったけど……お前に頼られるのは嬉しい事だからさ」

「それだけで充分嬉しいよそうだ、今日は記念日だねえ」

「記念日い？ 何かあったっけ？」

「夕紀の初体験だよ」泣いた初体験っ！

俺は一瞬だけ顔を赤くしてしまった。そう言う意味ね……夕紀って純粋な分だけ意味も理解せずに発言するからなあ……

「そっか……俺も夕紀の泣くのを見たのは初めてだな……」

「見たの？」

「え、ま、まあ……見えた……かな？」

「どしてえ！ 見ないって言っただじゃんっウソつき」

「ちょ、夕紀その体勢はマズいからっ！」

「問答無用うっ！」

夕紀が俺に抱き付いて泣いていたのである。ベッドの上で……それから夕紀が俺を突き飛ばして怒っている。俺が下で夕紀が上乗りになっている。

「ねえっ！ 何で見たの？ 夕紀の泣き顔見ないって言ったでしょ」

「ご、ゴメンって言うてるだろっ！ 悪かった。ちょゝ悪かったからあゝ」

「透弥あゝ見舞いに来たぞゝ」

真夜が夕紀の病室に入って来た。

「透弥……お前にはそっちの趣味があつたのか……」

真夜はそのまま帰って行ってしまった。

「何で帰ったのかなあ？」

「今の俺とお前の状況を見てみる……」

夕紀が三秒くらい硬直したあと、だんだんと顔を真っ赤に染めた。その後……

「お兄ちゃんのバカああああっ！」

と叫んでから俺の頬をビンタで連打しやがった。

「ちょ……待てっ痛いっ！ 待てっ痛いっ……ちょ、ごめ……痛いっ！」

「はあ……はあ……はあ……」

ようやく落ち着いたのか夕紀は平常心を取り戻した。

「ごめんねお兄ちゃん……」

「いや……別に問題は無い」

俺は取り合えず夕紀にどいてもらってから、ベッドから降りて椅子に座った。

「取り合えずは病人なんだから、夕紀はベッドで寝てろ」

「ヤダ……」

「はあ？」

「だって寝たらお兄ちゃんがいなくなるもん……」

「俺はいなくならないさ……」

「機械さんだって夕紀が起きたら止まったもん……」

相当なトラウマになってしまったらしい……そりゃあ夕弥の事を自分の子供とまで言って可愛がってたんだからなあ……そりゃあシヨックだったのは判る。

「俺はいなくならない……約束する。だから寝るんだ……」

「ダァ〜メ……夕紀は眠らないの」

俺はどうしたら夕紀が眠ってくれるかを考えてみた。そしたら夕紀がこんな事を言い出しやがった……

「じゃあさ……お兄ちゃんが夕紀を寝かせて……」

「はあ？」

「だからあ……寝るまで一緒にいてよ……」

「それは別に良いけど……」

夕紀がベッドの端によつて、開いている自分の隣を手で叩いた。

「どした？」

「ほらあ……早くこつち来てよ……寝るまで一緒にいてくれるんでしょ？」

「判つたが……急にどうしたんだ？」

「えへへ、熱で頭おかしくなつたのかなあ……甘えても良いんでしょあ？」

「まあ……な」

俺は夕紀の額を触つてみると……結構な高熱だつた……機械のシヨックで熱が上がつてしまつたのだらう。

「夕紀、俺が側にいてやるから取り合えず寝ろよ……な？」

「やつぱりヤダ……病氣治したく無い……」

「ずう〜つとしんどいままだぞ？ 頭ズキズキするし、ノドも痛いしだぞ？ それでも良いのか？」

「うん……だつて、夕紀が病氣の間だけお兄ちゃんは夕紀の事だけを見てくれるし、いつも以上に優しいもん……」

「俺をあまり心配させないでくれ……良い子だから寝るんだ」

俺は夕紀の額に一度だけキスをしてから夕紀の背中に手を当ててゆつくりと夕紀をベッドに横たわらせた。

「お休み……夕紀」

「この病室から出たらダメだからね？ 絶対に……ぜつたいにダメなんだからね」

「了解……判ったから早く寝ろ。いつぱい寝て早く熱を下げような」

夕紀がぐっすりと眠ってくれて俺は安心する事が出来た。しっかし夕紀の言う『病気の間は優しくしてくれる』って発言がすごく気にかかる。普段の俺はそれ程優しく無いのだろうか……

「ううーん……ま、悩んでも仕方無いか。まずは夕紀の完治が先決だしなあ……あ、布団から肩が出てるじゃ無いか……」

「失礼しまあゝす」

俺がそう思っただけで夕紀の布団に手をかけたのと鼎ちゃんが病室に入っただけで来たのは同時だった。

「透弥先輩……寝てる夕紀ちゃんに何をしてるんですか？」

何で俺の周りの人間はタイミングの悪いときに入って来るかなあ……今は全く普通の行動なだけだなあ……もしかしたら俺への嫌がらせでずっとタイミングを見計らってたんじゃないかと思えてくる。鼎ちゃんは真夜という時間が長いからそれくらい出来そうだしなあ

「いや、俺は夕紀の布団から肩が出てるから直してやろうと思って……」

「あ、そうだったんですかあゝいやあ、勘違いでした」

「友達を心配して見舞いか？ 感心だね」

「え、いや……そ、そんなあ……」

「何で照れるかなあ……？ 夕紀と鼎ちゃんは友達だろう。友達思いなんて良い事じゃないか」

「夕紀ちゃんが……私の友達？」

「そつだよ。ああ、夕紀ならあと一週間もすれば完治すると思うから心配はしなくて良いよ」

「夕紀ちゃんはいつも元気いっぱいだから治ると信じてますけど……」

……透弥先輩は大丈夫なんですか？」

「俺？ 俺は特に大した事も無いんだけど……」

「体じゃなくて、勉強です。透弥先輩は勉強の方は大丈夫なのです」

か？」

「ああ……後で真夜が教えてくれるだろうから大丈夫だとは思っけど……あ、もし鼎ちゃんが良かったら良いんだけど、夕紀の勉強を鼎ちゃんが教えてやってくれないかな？」

「私が人に勉強教えるなんて……透弥先輩って妹思いなんですネ……私も透弥先輩みたいな優しいお兄ちゃん欲しいなあ……」

「俺なんて……いつつ夕紀に優しくしてやろうとか思いながらバカばかりで夕紀に大した事もしてやれてなくて……夕紀が死にたいとまで思っても俺は夕紀を死なさない事も出来なくて俺も一緒に死ぬって結論にしか辿り着けなかったただのダメ兄ちゃんだよ……」

「そんな事無いですよ……夕紀ちゃんはいつとも透弥先輩の話をする時は顔が幸せそうですもん。きつと夕紀ちゃんの心の中は透弥先輩の事を尊敬とか愛情でいっぱいなんですよ」

「そうかな……」

「きつと夕紀ちゃんは透弥先輩の事が大好きですよ……私も透弥先輩の事は大好きですから」

「え……？」

「あ……わ、私ったら何を言ってるんでしょうか……透弥先輩には夕紀ちゃんがいるのに……迷惑ですよネ？ 私に好きとか言われたりしても迷惑でしか無いですよネ……ご、ごめんなさい」

「いや、女の子に好きって言われるのは嬉しいよ……俺は決して迷惑なんかじゃ無いよ……でもね、鼎ちゃんの好きって言っるのは憧れと愛情どっちなのかな？」

「私は……夕紀ちゃんへの好きは憧れだけど……透弥先輩は本当に優しく、素敵で……多分愛情だと思います……」

「そっか……ありがとう。そう言ってもらえると嬉しいよ。俺に言える事は一つだけだ……『その感情は……捨てた方が良い』……俺は夕紀への愛情を捨てる事は決して出来ない。だから鼎ちゃんの愛情に応える事は出来ないんだ」

「ごめんなさい……」

「良いよ……嬉しかったのは本当だから……」

「ごめんなさい……私っ！」

鼎ちゃんが俺に近づいてくる。俺がボーっとしていると、鼎ちゃんの唇が俺の唇にくっついた。俺は一瞬だけ何が起きたのか理解が出来なかった。

「鼎……ちゃん？」

「ごめんなさいっ！ これで絶対の絶対に最後にしますからっ！
そ、その失礼しますっ！」

鼎ちゃんは病室を走り去って行った。

俺は鼎ちゃんを追いかけようとした。

「お兄ちゃん……ずうくと一緒にいてね……」

そんな夕紀の声がしたので、俺はその場にしゃがみ込んだ。

「俺は……やっぱり最低だな……ただの偽善で人の愛情を受けて……
それで俺は受け入れる事が出来ない……夕紀を捨てる事も出来ず……
に他人を俺に惚れさせてしまっている。」

俺は最低な人間だ……俺に何か出来る事は無いのか……俺にしか出来ない何かが……

第九話

俺は何時間くらいその場にしゃがみ込んでいたのだろう。俺は夕紀に声をかけられて正気に戻った。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

「夕紀……夕紀っ」

俺は何が何だか判らずに夕紀を強く抱きしめた。急に夕紀が遠くに行きそうな気分になったから……

「お兄ちゃん、痛いよぉ……」

「ずう……と一緒にだから……俺の側からいなくならないでくれ……」

「何を言ってるのぉ？ お兄ちゃんの方が甘えんぼさんだねえ……もしかして何かあったのかなぁ？ 夕紀に相談してみなよぉ」

俺は夕紀に先程のやり取りを全て話した。夕紀に隠し事はしかなかったからだ。

「鼎ちゃんが……そんな事を。で、それで夕紀に抱きつくの？」

「俺は鼎ちゃんを拒む事が出来なかったんだ。そしたら何だか急に夕紀がどこかへ行ってしまう気がしたから、それで……よく判らないけどお前の事を感じていたかったんだ……」

「ふう……ん……」

俺は取り合えず夕紀をベッドの上に運び、俺も夕紀の横に腰掛け

た。

「ええ……もうヤダよぉ……充分寝たんだから遊びたいよぉ」

「熱下がって無いんだから……」

「ダァ……メタ紀は遊びたいのぉ」

「良い加減にしるよぉ……まだ熱が下がって無いのに遊ばません」

「えへへ、何だかお父さんみたい……」

「そっかぁ……？」

「でも遊びたいよぉ」

「熱が下がったらいくらでも遊んでやるよ……」

「むう」

「膨れたってダメな物はダメだ」

「ええ、ダメなのお？」

「ダメ、良い子だからちゃんと寝てな……」

俺は夕紀の額にキスをした。

「むう、今回はそんなんじゃ寝ないもんっ」

「じゃあ、どうしたら寝てくれるかな？」

「鼎ちゃんもしたんでしょ……？ 同じ事してくれなきゃダメ……」

……

「ん……それは少しマズいと思うけど……」

「鼎ちゃんには出来て夕紀には出来ないの？」

「俺の理性が持たないと思う……」

「良いからっ！」

コイツは全く人の話を理解していないな……ま、良いって言っ
ら……

俺は夕紀の唇にキスをした。

「何だか普通だね……」

「そっか？ そう言うわりには顔とか真っ赤じゃん……」

「こ、これは熱だからだよぉ」

「じゃあ早く寝ろ……で、元気になったらまた一緒に学校行こうや」

「ええ、病氣治したく無いよぉ……」

「まだそんな事を言ってるのかよ……俺を心配させないでくれよ」

「ヤダ……」

「頼むから……」

俺は少し目眩がした。そう言えば最近は一睡もしてなかったな……

「大丈夫？ 夕紀よりお兄ちゃんの方が重症なんじゃないの？」

「俺は大丈夫だ……」

「そっだ、じゃあ……お兄ちゃんが寝るなら夕紀も寝るっ！」

「そっか……じゃあお言葉に甘えて俺も寝るとしようかな……」

俺は夕紀の背中に手を回してゆつくりと寝かせた。

「んもう……一人で寝れるよぉ」

「はいはい、病人は黙って寝てなさい……」

俺は疲れが溜まっていたのか、それだけ言うと深い眠りに落ちてしまった。

翌日……

「ホントですかっ!？」

俺は薄い意識の中で夕紀の喜び声を聞いた。眠い……良く聞こえない。夕紀は何を喜んでいるんだ……薄れる意識の中、俺は退院と言う言葉をしっかりと聞いた。が、そのまま眠りに落ちてしまった。問題は……透弥くんの方なのだよ……」

「え、お兄ちゃん何か問題なんですか？」

「いやね……彼の方は何も問題は無いかい？」

「はい……お兄ちゃんは別に……あ、そうだっお兄ちゃんって治療を受けなかったって本当ですかっ!？」

「あ、ああ……君の治療を優先にと言われてね……本当は彼の方が治療を優先させるべきだったのだが……治療を強制する事は出来ないから君しか見ていないのだよ……透弥くんに別状は無いかい？」

「あ、はい……」

「ふむ……では、君は退院の準備をして、透弥くんが目覚めたら帰っても良いからね」

「えっと……お兄ちゃんは起きるのがいつか判らないんですけど……」

「看護師の方から寝ずの看病だったと聞いているよ。私は何時までいても構わないよ」

「ありがとうございます」

そう言うとドクターは出て行った。

「ふっふっん……お兄ちゃんは早く起きないかなぁ」

俺はぐっすりと眠っていた。

「ん〜……こうやって見ると可愛い寝顔だなあ〜……今ならキスしても……」

夕紀は俺の上に馬乗りになって自分の顔を俺の顔に近づけて行く。

「夕紀……それはおはよのキスって奴なのか……？」

「な、何で起きるのっ！」

「いやあ……何でって言われても……」

夕紀の肩がプルプルと震えている。これはそうとう怒っているなあ……

「乙女に恥をかかせるなんて……ここは気付いても寝てるフリをするべき所だと思っただけど……普通はそうだよなあ？ もう良い、せっかく待ってたのに……帰るっ！」

「帰るって……退院かつ！？ 良かったなあ……なら一緒に帰ろう」「ヤダっ！ 一人で帰りなよ……」

夕紀は病室を出て思いっきり病室のドアを閉めた。俺、本気で怒られたな……

「どうしよ……あれじゃあ会ってくれそうにもねえよなあ……会わずに気持ちを伝える方法……手紙……くらいしかねえかなあ」

俺は自分の荷物も片付けてから病室を後にした。

家に到着した俺は、夕紀にバレ無い様にそお〜と家に入ってから自分の部屋に戻る事にした。

「ヤベ……リビングに夕紀がいる……」

俺は夕紀に会わないで二階に行く方法を考えていた。すると、夕紀の泣き声が聞こえてきた。

「アイツ……泣いてるのか。結構泣き虫だったんだな……オイ、夕紀……」

「お兄ちゃんっ！？ また見た……夕紀の泣き顔また見た……酷いよ……」

「ごめん、でも……俺は夕紀の事なら何だって知ってたいから……」

病院でも配慮が足りなかったなら謝る……ゴメン」

俺は本心を言ってみた。

「ウソでしょ？」

「なんだあ？ 俺を疑うつてのか……そうだ、それよりお前の退院祝いをしようか。誕生日と一緒にさ」

「話ごまかしてるよぉ」

「嫌か？」

「ううん、嫌じゃ無いよ。じゃあ……ケーキ買いに行こうよっ！」

「良いぞ……」

俺と夕紀はケーキを買いに行く事になった。しかし、16にもなってるのに誕生日にケーキってよぉ……まあ、夕紀が喜んでるんだし良いか……

最終話

俺と夕紀はチャリで近所のケーキ屋に向かった。俺は今回は夕紀を祝う役なので、夕紀にケーキを選ばせる事にした。

最初は色々なケーキを夢中に選んでいる夕紀だったのだが、途中で一箇所に留まってしまった。

「そのケーキが食べたいのか？」

「う、うん……」

夕紀が顔を赤くする。ケーキを買うだけのにどうして顔を赤くする必要があるのでろうか。何か秘密があるのだろうか……

「そちらの男性のお名前は？」

「え、俺……？ 俺は名倉透弥だけど……」

店員はニヤニヤしながら店の厨房の方へ消えて行ってしまった。

「なあ……どうして俺の名前がいるんだあ？ お前のケーキだろう？」

「えへへ、帰ったら判るよ」

俺の頭の中を？マークが乱舞する。店員が厨房から出て来て夕紀にケーキを渡す。特に高価なケーキでも無いので助かった。

俺はケーキをチャリに積んでから家までチャリを走らした。

「ふう……特に何の用意も出来てねえが……始めるか？」

「う、うん……」

まだ夕紀の顔は真っ赤だ。

「お前……もしかしてまだ熱があるのか？」

「そ、そんな事無いよぉー早く食べようよぉー」

俺がケーキを開けると夕紀が顔を真っ赤にする意味が理解出来た。

「夕紀……これは何だ？」

よくケーキを見ずに買った俺も悪いが……バースディケーキにこれは無いだろう。ケーキには、ハート型のチョコに俺と夕紀の名前

が書いてあった。これって、恋人が買っ奴だよな……

「エへへ、一度お兄ちゃんに買っ欲しかったの」

「あ、そうなのか？ ん…… 良いケーキではあるよな……」

「はい、あぁ〜ん」

「は？」

夕紀がケーキをフォークにさして、俺の口の前に持ってくる。

「ほらぁ〜食べさせてあげるからぁ〜」

「ひ、一人で食えるっつ！」

「何い？ 夕紀のケーキは食べられないって言うのぉ？」

「いや…… じゃ、じゃあ……」

俺は口を大きく開けた。夕紀が俺の口の中にケーキを突っ込んで来た。

「ふごっ！」

ケーキがかすぎたのか、少し俺の口からケーキがはみ出した。

「あ、ゴメンね。ケーキ大きすぎたかなあ……」

俺が手で取ろうとしたら、夕紀が俺の口についたケーキを舐めて取った。俺は普通に顔を真っ赤に染めた。

「お兄ちゃん顔真っ赤だよぉ〜可愛いつ」

「ば、バカ……」

「えへへへ、お兄ちゃんったら顔真っ赤にしちゃってえ〜そんな照れる事なんか無いのにさぁ〜」

「俺…… ケーキの生クリームとか甘いから嫌いだし……」

「そうなんだぁ〜」

夕紀はおもむろにショートケーキのイチゴを口に含んでから、先っぽの部分を咥えた。

「何してんの……」

「生クリーム取ってあげたの。食べたい？」

「そりゃあ…… 夕紀が一度食べた奴なら……」

「え、お兄ちゃんっつて変態さん？」

「違っつっのっ！」

「ほら、食べて良いよ」

「じゃ、じゃあ……」

俺は夕紀のイチゴを取る為に手を伸ばした。が、夕紀が首を引っ込めた。

「ダ〜メ……口で取らなきゃ上げない……」

「お、お前……意味判って言ってるの？」

「もちろんっ口移して奴だよねえ？」

俺は仕方無く夕紀の唇にキスをしてからイチゴを食べた。

「ん……美味しいな……」

「ホント？」

「うん、夕紀の味がする……」

「もう、恥ずかしい事言わないでよ……」

「夕紀がやりだしたんだろう？」

俺と夕紀だけの誕生日パーティーは少し道をずれながらも進んで行き、俺も夕紀も楽しく少し遅れた誕生日を過ごす事が出来たんじや無いだろうか……

「お兄ちゃん、ずう〜と楽しい日々が続くと良いね……」

「明日からテストが近いから地獄だぞ？」

「ええっ！ 何で今更そんな事言うかな……？」

「良いじゃん……最後にお前に伝えれただろ？」

「最後って何？ 意味判んない……また夕紀を置いてどっか行く気？」

「さあ……どこだろうな……天国か地獄か……はたまた病院のベッドの三択だとはおも……う」

俺はそのまま気絶した。やっぱり夕紀に心配かけまいと思って無理したのがバレたか。そりゃあ夕紀以上に雨に打たれたからなあ……それに一日徹夜で看病してたし……

「寝ちゃった……ベッドまで運ばなきゃ……って熱っ！ これって百度くらいはあるんじゃないかなあ……？」

夕紀が俺をベッドに運ぼうとした時、俺の体が以上に熱い事を確

認した夕紀である。ちなみに人間の体温が百度になると血は沸騰するはずだ。

「寝ちゃったんじゃないかって……気絶？　びよ、病院行かなきゃっ！」

ほんの少し……ほんの少しだけ辛い事もあるかもしれないけど、コイツがいるならどんな辛い事だって乗り越えて行ける。そんな事が思える程夕紀の存在は俺にとってでかくて心からお礼を言いたいくらいだがそんなのは恥ずかしくて言えやしない。

こんな感じで俺と夕紀の関係は続く。今までもそして……これから

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7270c/>

花の高校生活

2010年10月8日15時56分発行